



予科練平和記念館

YOKAREN PEACE MEMORIAL MUSEUM

年報

第2号

(平成24年度)

予科練平和記念館

住所：〒300-0302

茨城県稲敷郡阿見町大字廻戸（はさまど）5番地1

TEL 029-891-3344

FAX 029-888-2470

E-mail yokaren-ofc@town.ami.lg.jp

ご利用案内（常設展開催時）

○開館時間：午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

○休館日：月曜日（祝日の場合は翌日休館）、年末年始

○入館料：大人500円（団体400円）

小中高生300円（団体240円）

町内小中学生は無料

ご挨拶

平成22年（2010年）の開館以来、本年2月で4周年を迎えました。

平成25年6月には、25万人目の来館者をお迎えすることも叶いましたが、これもひとえに関係各位のご支援、ご協力の賜物と、心より感謝申し上げます。

予科練平和記念館では、阿見町の貴重な歴史遺産である予科練、また旧海軍航空隊や戦史記録を保存、展示するとともに、次の世代へ精確に伝承し「命の尊さ」「平和の大切さ」を考えていただくための施設として、一層の充実に取り組んでおります。

特別展、企画展等の展覧会事業、各種の教育普及活動を通じて、児童・生徒の平和学習、社会科学習はもちろんのこと、広く社会教育の場として役割を果たすことで、地域の文化向上はもとより、世界の恒久平和実現に寄与してまいりたいと考えております。

今後は、特に若い世代にとっての地域振興拠点としても「予科練平和記念館」を全国に発信し、常に魅力ある情報提供が行えるよう、運営に励んで参りますので、皆様から一層のご支援・ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ここに、平成24年度の活動状況を取りまとめましたので、ご高覧いただければ幸甚に存じます。

平成26年3月

予科練平和記念館
館長 加藤 力男



【目次】

◆館長挨拶

◆平成24年度活動記録

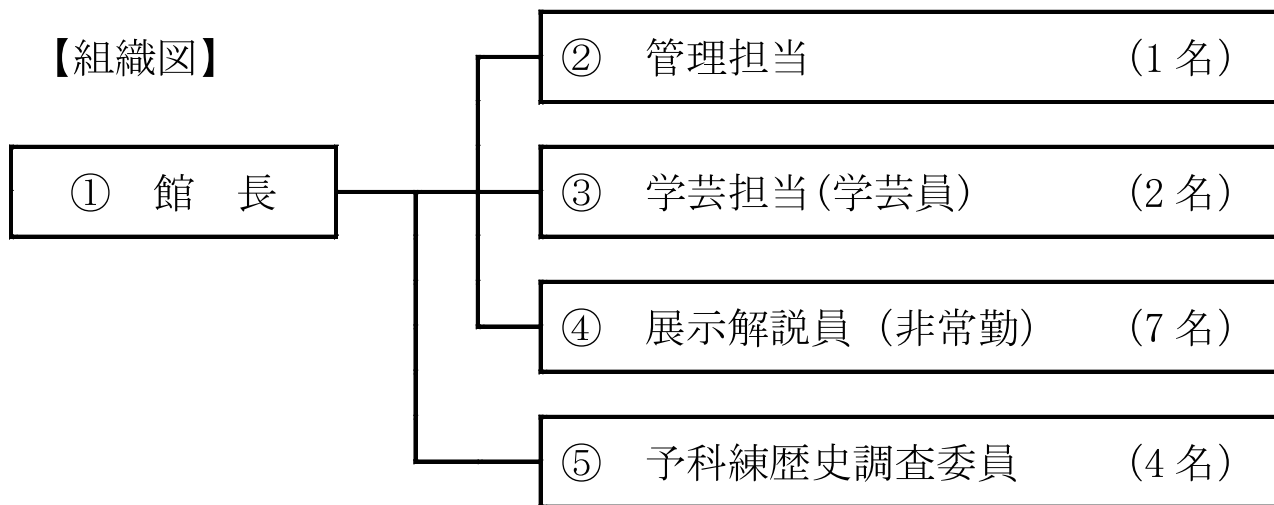
1. 運営事業について	・・・	1
2. 展示事業	・・・	4
3. 教育普及事業	・・・	6
4. 資料収集・調査研究事業	・・・	14
5. 広報事業	・・・	14
6. 予科練平和記念館歴史調査員 の活動について	・・・	14
7. その他	・・・	15

◆特別展「回天」講演会要旨

・・・ 16

◆参考資料「予科練平和記念館建築概要」

・・・ 28



※その他、清掃 (1 名)

通常、6～8 名で運営 (4 月 1 日現在)

1. 運営事業について

(1) 開館日数

305 日 (毎週月曜日、年末年始休館、展示替えによる臨時休館 5 日)

※ 無料観覧日の設定 3 日 (予科練戦没者慰霊祭、終戦記念日、開館記念日)

(2) 職員研修

① 類似施設視察 7 月

靖国神社遊就館、しょうけい館戦傷病者史料館 (いずれも東京都) を訪問し、来館者に対する展示の案内方法、資料作成、小中学校に対する学習支援策などを視察。

② 航空自衛隊百里基地視察 3 月

航空自衛隊百里基地を訪問し、来館者に対する広報活動について幅広く学んだ。また、百里基地のご厚意により、戦闘機離陸訓練の様子、格納庫内の飛行機見学、基地内売店の視察など、たいへん有意義な視察を行うことができた。

③ 避難誘導、水消火器訓練 3 月

- ・ 定例の避難誘導訓練を実施した。
- ・ 阿見町消防本部の指導により、水消火器訓練を実施した。



(3) 入館者及び観覧料

年 度	開館日数	入館者	日平均	観覧料(円)	備 考
H21	50	18,032	361	7,384,150	
H22	286	76,313	267	29,173,692	
H23	296	42,847	145	15,747,491	
H24	305	52,964	174	19,345,028	
合計	937	190,156	237	61,284,159	

(4) 入館者内訳

年度	有料観覧者	(有料のうち 教育活動)	無料観覧者	(無料のうち 町内小中生)	無料エリア	計
H21	15,568	65	2,072	287	392	18,032
H22	67,563	672	7,116	1,191	1,634	76,313
H23	34,421	475	6,295	663	2,131	42,847
H24	41,299	1,063	8,096	1,101	3,569	52,964
合計	158,951	2,275	23,579	3,242	7,726	190,156

(5) 月別入館者 (H24年度)

月	有料観覧者	(有料のうち 教育活動)	無料観覧者	(無料のうち 町内小中生)	無料エリア	計
4月	3,160	0	300	28	381	3,841
5月	3,447	23	853	138	238	4,538
6月	3,677	376	441	166	196	4,314
7月	2,661	52	404	36	306	3,371
8月	5,037	8	1,661	60	355	7,053
9月	4,065	67	398	6	281	4,744
10月	5,146	41	481	22	338	5,965
11月	3,993	29	856	197	426	5,275
12月	1,643	191	509	316	190	2,342
1月	1,973	122	815	102	286	3,074
2月	2,701	109	901	7	278	3,880
3月	3,796	45	477	23	294	4,567
計	41,299	1,063	8,096	1,101	3,569	52,964

(6) 主な来館団体

項目	件数	人数	備考
親睦団体	90	1,733	個人、職場、地域等の親睦団体（関東甲信越、東北中心）
高齢者クラブ	63	2,265	県内、近県から
農業団体	35	706	県内、近県から JA 関係（年金友の会など）
観光ツアー	27	910	バスツアー、お買い物ツアーなど
自衛隊関係	20	400	自衛隊協力会、父兄会、後援会など
自衛隊	33	593	高射学校、百里基地、ヘリコプター部隊など
遺族会	10	325	関東甲信越地方、静岡県を中心とした遺族会
生涯学習団体	21	604	短歌会、俳句会、歴史研究会など
公民館	18	568	高齢者学級、歴史教室など
小学校	14	772	町内、私立リリーベール小学校、下妻市立豊加美小など
中学校	10	724	町内、常総学院中、土浦日大中など
その他	284	7,036	
計	625	16,636	

(7) 書籍販売

年度	阿見と予科練	予科練ものがたり	続・阿見と予科練	ガイドブック	カルタ	計	販売金額(円)
H21	101	541	123	0	0	765	826,700
H22	166	757	118	1,082	40	2,163	1,362,300
H23	46	318	42	395	52	853	540,000
H24	46	273	22	436	40	817	462,300
合計	359	1,889	305	1,913	132	4,598	3,191,300

(8) 館内アンケート

① 総数 1,107 人 回収率 2.2 %

② 主な内容

- 1) 展示内容について 「満足」 77.1 %、「やや満足」 20.1 %、複数回の来館者 9.8 %
- 2) 住所地 町内 11.3 %、県内 54.2 %、県外 34.5 %

2. 展示事業

(1) 特別展示事業

第2回特別展「回天」

「回天記念館」（山口県周南市）所蔵の元搭乗員の遺品、TBS テレビから寄贈された実物大回天模型、コックピットなどを展示し、強い実感を伴う展覧会を企画しました。

※回天特攻隊員には土浦海軍航空隊（阿見町）で訓練を受けた予科練甲種13期生も選抜され戦死者も数えるなど、阿見町とも深く関係しています。

※回天（魚雷を改造して大量の爆薬を搭載し、隊員自らが操縦して敵艦に体当たりする特攻兵器。人間魚雷と呼ばれた）

◇会 期 平成24年7月21日（土）

～10月28日（日）

[開館日数 85日]

◇総来館者数 19,111名

(内有料入場者数 15,300名)

◇入館料収入 8,078,378円

◇展示点数 59点

◇取材等

- ・朝日新聞（7月末。展覧会開催案内の小記事）
- ・読売新聞（7月末。展覧会開催案内の小記事）
（9月上旬。講演会開催コラム）
- ・日本経済新聞（8月上旬。展覧会開催案内の小記事）
- ・茨城新聞（8月中旬。展覧会開催記事）
（9月下旬～10月初旬にコラム5回掲載）
- ・常陽新聞（8月中旬。展覧会開催記事）
- ・東京新聞（8月中旬。展覧会開催記事）
- ・毎日新聞（8月中旬。展覧会開催記事）
- ・常陽リビング（8月下旬。展覧会開催記事）
- ・NHK水戸放送局放映（8/15・昼、夕、夜の地方ニュース）
- ・茨城放送（ラジオ・8月中旬、展覧会開催案内）
- ・ミニコミ誌『ezpress.』10月号（9月下旬）に展覧会開催記事掲載。

◇展覧会案内（12回。土日の定時展示解説の後実施）

◇関連事業

① 元回天搭乗員講演会（有料）

第1回「回天の誕生」8/26（日）14:00～15:30 於：かすみ公民館

- ・講師 塩月 昭義 氏（元予科練甲飛13期生－奈良空。光基地、大神基地を歴任後、愛媛県の麦ヶ浦基地にて終戦をお迎えになった）

- ・内容は◇塩月氏が予科練を志望した理由

◇入隊当時（昭和18年）の世相



- ◇回天搭乗員志願が募られた時の様子
- ◇回天開発の経緯、回天の訓練 など
- ・聴講者 148名（関係者を除く）

第2回 「訓練・出撃」9/30（日）14:00～15:30

於：かすみ公民館

- ・講師 塩月 昭義 氏
- ・内容は ◇回天開発の経緯、回天の訓練
 - ◇回天に多かった事故
 - ◇大神回天基地、麦が浦回天基地
 - ◇終戦 など
- ・聴講者 116名（関係者を除く）



② 町内小中学校への出張講義

平成24年5月中に、阿見中3年生（来館授業）吉原小6年生（出張授業）に特別展「回天」および予科練に関連する授業を受けてもらい、後日に作文してもらった。その中から何名かの作文をパネル化し、特別展にて展示した。
→平和学習の取り組みの一環として、茨城新聞の取材をうけた（8月）。

(2) 所蔵資料展

第5回所蔵資料展

日時：「兄を追って」4/24（火）～7/1（日）（1週間会期延長）公開61日

内容：予科練生を兄に持つ二組の兄弟の資料から、家族の絆や、戦争が普通の家庭に与えた影響の大きさについて考えていただく展示です。

展示資料数：実物資料124点 図書資料58点 計182点

期間中に入館者：9,887名（有料9,394名 無料493名）

新聞掲載：4誌4回

8/8 日経新聞

5/14 常陽新聞

5/14 常陽リビング

5/30 茨城新聞

（8/26 資料寄贈者辻猛氏の記事が
常陽リビングに掲載）

テレビ放映：2社30回

5/14（金）～5/20（日）J:COM 計28回

5/22（火）NHK水戸放送局 ニュースワイド茨城

5/28（月）NHK 首都圏ネットワーク

（「兄を追って」展NHK放送の情報は、朝日、読売、産経、茨城の番組欄に掲載）



(3) 第1回企画展「予科練甲種14期生～特攻が始まった年の入隊者たち～」

会期：11/20（火）～ 3/31（日） 開館日数：109日（予定）

内容：予科練生を各種・期別に紹介することで、制度が複雑な予科練について理解を深めてもらう一環。甲飛14期生は予科練史上最高の4万人超だった。その数には日本の戦局悪化が如実に表れており、また昭和19年10月に始まった特攻作戦によって予科練生の訓練内容や進路に大きな影響が出たことが理解しやすいと思われる。甲飛14期生を通して、かつて海軍の航空戦力を力強く支えた予科練が、終戦間際には時代に翻弄されたこと、また優秀な人材が失われたり、その能力を十分に発揮できなかったことについて様々に考えていただきたい。

◇展示資料数：80点（予定。展示替えに伴う増減有り）

◇新聞取材・記事掲載：茨城新聞（1月）

常陽新聞（1月）

◇新聞広告：読売新聞茨城版（1/10〈木〉1/25〈金〉）

常陽リビング（2/9〈土〉）

◇新聞コラム：5回掲載（茨城新聞）

◇元予科練生講演会（有料：観覧料金）

場所：予科練平和記念館ラウンジ

時間：14:00～15:30

〔第1回〕12/16（日）講師：戸張 礼記 氏

（阿見町在住／甲14・土浦空）

参加者：52名

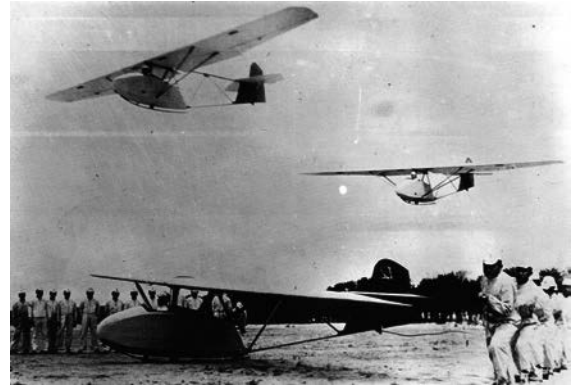
講演会冒頭と終了後に吾妻久美様による琴の演奏が行われた。

〔第2回〕2/24（日）講師：手島 修 氏

（新潟市／甲14・美保空）

参加者：146名

予科練や特攻に関する手島氏編集のDVDを見た後、予科練について、また手島氏が経験された山口県平生町における特殊潜行艇「蛟龍」に関する質疑応答を行った。



3. 教育普及事業

(1) 戦争体験者講演会

①女性が語る戦争 Vol.1 「昭和ガールズトーク」

日時：7/14（土）14:00～15:10

場所：予科練平和記念館20世紀ホール 講演会のみ無料

内容：戦時下に予科練の近くで少女時代を過ごした女性が語る予科練とは、戦争とは。少女たちのあこがれだった予科練生との初恋や空襲体験などについて対談形式でうかがう企画です。

話者：熟田鶴江さん（青宿在住） 来場者数：69名

情報誌掲載：1誌1回 8/4常陽リビング

（8/14 話者熟田さんの記事が東京新聞に掲載）



②女性が語る戦争 Vol.2 「上空看護婦が語る戦争と空襲」

日時：7/15（日）14：00～15：10

場所：予科練平和記念館 20世紀ホール 講演会のみ無料

内容：昭和20年6月10日、空襲の目標となった土浦海軍航空隊ではいったい何が起こっていたのか。実際に空襲を体験した元看護婦の方に予科練と空襲を語っていただきます。激動の戦中戦後を看護の現場から見つめた女性の貴重な体験談をお聞きいただく企画です。

話者：角田しづ子さん（元土浦海軍航空隊看護婦 常総市在住）

（当日飛び入りで元同僚2名が話者として参加）

来場者数：96名



(2) 出張講座

① 土浦青年会議所

日時：4月28日（土）15:00～

場所：茨城県県南生涯学習センター

内容：土浦青年会議所会員を対象に、
講演会「語り継ぐ!! 知られざる予科練」

講師：戸張礼記氏

② 県南歴史勉強会

日時：11月10日（土）

場所：阿見中央公民館

内容：講演会「語り継ぐ!! 知られざる予科練」

講師：戸張礼記氏



③ 龍ヶ崎市コミュニティーセンター

日時：12月9日（日）9:45～

内容：龍ヶ崎市との共催事業

戦争体験を語る会「語り伝えよう あの戦争のこと」

講師：仲川武男氏（乙20期・稲敷市）、青木学芸員

④ 阿見町役場

日時：2月15日（金）15:30～

内容：役場の中堅職員（課長補佐・係長職）を対象に
講演「阿見町の歴史（阿見原の巨大飛行船格納庫）」

講師：赤堀好夫氏（当館歴史調査委員）

八木司郎氏（元予科練資料収集委員）



⑤ 県立土浦第三高校

日時：2月26日（火）13:30～

内 容：講演「語り継ぐ!! 知られざる予科練」2年生対象の道徳授業において
講 師：井元潔氏、戸張礼記氏（当館歴史調査委員）、加藤館長

(3) 大人のための朗読会「加奈の小さなおはなし会」

〔第1回〕日時：5/12（土）13：30～14：30

場所：予科練平和記念館ラウンジ 無料

内容：元茨城放送アナウンサーで現あみ大使の藤田加奈子さんによる大人のための朗読会。

朗読内容：『ちいさなへいたい』（パウル・ヴェルレプト作）『ニワトリおぼけ』『瀬戸内の鬼』
『忠さんと制服』『選手になれ』（以上4冊西澤実作）『野ばら』（小川未明作）
全6作品

来場者数：32名

〔第2回〕日時：2/16（土）13：30～14：30

場所：予科練平和記念館ラウンジ 無料

朗読内容：『ショールの女』

シンシア・オジック著

『ニワトリおぼけ』（映像使用）

『忠さんと制服』

『うまのおんせん』西澤 実作

全4作品

来場者数：50名

その他：途中小休憩あり。休憩時にホットティーをサービス。



(4) 予科練平和記念館学習会 ～戦跡を巡る～

〔第1回〕 5/20（日） 9:30～13:30

今回は、旧鹿島海軍航空隊（美浦村）大日苑（稲敷市）などをバスで巡りながら、当館学芸員が解説を行いました。

※ 参加定員53名に対し、53名の申込み。

（大型行政バス定員。県外、町外からの申込みもあった）

※参加費用は無料。

※今回のルート 旧舟島格納庫（バス車中見学）→旧鹿島海軍航空隊→大日苑

※大日苑では、管理するNPO法人の方から熱心なご案内を受けた。

〔第2回〕 10/14（日） 9:30～15:30

今回は、大杉神社（稲敷市）桜花公園（鹿嶋市）神栖市歴史民俗資料館（神栖市）をバスで巡りながら、当館学芸員が解説を行いました。

※ 参加定員53名に対し、40名の申込み。

（大型行政バス定員。県外、町外からの申込みもあった）

※参加費用は無料。

※今回のルート 大杉神社→桜花公園→神栖市歴史民俗資料館

※神栖市歴史民俗資料館では、館職員からご案内を受けた。



(5) レコード鑑賞会 11/23 (金・祝日) 17:00～18:00

昭和初期のレコードを当時の蓄音機で鑑賞していただきました。

参加者数：8名

曲目①ラバウル海軍航空隊②加藤部隊歌③水兵さん④海の初陣
⑤涙の駒鳥⑥旅空夜空⑦誰か故郷を想わざる⑧海ゆかば
⑨決戦の大空へ⑩若鷺の歌



(6) こどもむけイベント

① 読み聞かせ「おはなしおさんぽの会&昔の遊びをやってみよう!の会」

〔第3回〕日時：7/7 (土) 10:30～、14:00～ 各回1時間 (読み聞かせ30分、昔の遊び30分)

場所：予科練平和記念館ラウンジ・20世紀ホール

参加費無料 (予約不要)

内容：幼児～小学校低学年を対象とした平和に関する
絵本の読み聞かせと、季節やニーズに合わせた
昔の遊びを体験する親子で楽しめる企画で、平
和について考えていただくとともに、20代～30
代の若い子育て層の来館をうながします。



読み聞かせ本：①『トマトさん』田中清代作

②紙芝居『かわいそうなぞう』土屋由岐雄脚本 (当館蔵)

③大型絵本『ちびごりらのちびちび』ルース・ボーンスタイン作

④『たなばたものがたり』舟崎克彦作

昔の遊び：たなばたかざりづくり、竹とんぼづくり

たなばたかざりづくり：おりひめとひこぼしの形をした色画用紙の短冊を用意し、かざり
をつけたり願い事を書いたりしてもらおう。あらかじめ作っておい
た七夕飾りと一緒に小さな笹に飾り、持ち帰って、家でも楽しんで
いただく。

竹とんぼとばし：阿見町の竹を使い、あらかじめ竹とんぼを作成。20世紀ホールで飛ばし
て遊ぶ。

参加者数：午前：36名 (大人17名 未就学児・児童19名)

午後：38名 (大人14名 未就学児・児童24名) 合計74名

雑誌掲載：1誌1回 6/23『はッピーママ』

読み聞かせ担当：宮久保 (展示解説員)・渡邊



〔第4回〕日時：11/24 (土) 10:30～、14:00～

場所：読み聞かせ：予科練平和記念館ラウンジ

スタンプラリー：館敷地および霞ヶ浦平和記念公園

読み聞かせの本：①『お月さまってどんなあじ?』マイケルグレイニエツ作

②『ねずみのすもう』いもとようこ作

③『ちいさなへいたい』パウル・ヴェルレプト作

④『おおきなかぶ』 A・トルストイ作

遊び内容：秋のスタンプラリー

記念館及び近隣公園の敷地に配された7つのスタンプを押すスタンプラリー。

スタンプはさつまいもやれんこん、にんじんなどを使って作ったもの。

全部スタンプがたまった台紙は、裏に色画用紙を貼り付けてトートバックにして、折り紙で作ったきのことどんぐりを入れて持ち帰る。

参加者数：午前 大人 18名 未就学児 20名 小学生 2名 計 40名

午後 大人 15名 未就学児 26名 計 41名 合計 81名

読み聞かせ担当：宮久保（展示解説員）・渡邊



② ものしりおじいちゃんに聞こう！阿見の昔のはなし

日時：8/11（土）・8/25（土）10：00～12：00

14：00～16：00

場所：予科練平和記念館ラウンジ 無料

内容：小・中学生を対象とした夏休みの宿題相談。

予科練平和記念館歴史調査委員が各日2名

ずつラウンジに待機し、来館者の質問に答える企画です。

質問者数：8/11 30名 8/25 30名 合計 60名

（参加者は小学生～大学院生、年配者までと幅広かった。）

質問一例・霞ヶ浦海軍航空隊、予科練・戦時空襲について（筑波大大学院1年生男性）

・君原地区の防空壕の場所など

（常総学院中1年生女子）

・予科練平和記念館はなぜできたのか、戦争はなぜおきるのか（阿見小3年女子）

・昔のこどもの遊びについて・ツェッペリンはなぜ来たのか（本郷小3年男子）

・戦前～戦後の生活について・語り伝えたいこと（茗溪学院中3年男子）

情報誌掲載：1誌1回 8/10 常陽リビング

③ いどうとしょかん

日時：3/24～5/6 7/14～9/15

場所：予科練平和記念館ラウンジ

内容：阿見町図書館からおすすめの絵本を借りたミニ

図書館。こどもの休みの時期にあわせて設置する

ことで、こどもが本と触れ合う機会をふやすとと

ともに、近隣公園利用者のラウンジ利用を促します。

冊数：毎回 35冊



④ 寒中祭

子どもたちに予科練平和記念館に対する親しみを持ってもらい、小中高生および保護者の来館者を増やすための一助とする。

◇1/27（日）10：00～15：00

①ミニトレイン（参加者：410名）

※当記念館に定期的にご来館いただいている
若柴長寿会（龍ヶ崎市）の洞澤弘敏氏（県南
ミニトレイン同好会会長）のご協力を得た。
記念館エントランスを発着駅とし、約50メー
トルの往復運行。大人が乗っても楽しかった。



②海軍体操・手旗信号演習

※仲川武男氏（乙20期・稲敷市）に講師をお願いし、
予科練ゆかりの海軍体操および手旗信号演習を行った。
10:00～（参加者：14名）、13:00～（参加者：31名）



③かるたラリー

※予科練かるたを記念館内に設置し、クイズラリー形式
で行った。

※10:00～15:00（随時参加。参加者：22名）

※参加者には、赤とんぼ紙飛行機を贈呈。

◇新聞取材・記事掲載：茨城新聞、常陽新聞。



(7) 体験・実習受入

① 職業体験受入 4校 14名 8日間

i) 美浦村立美浦中学校2年生 2名

日時：7/21・7/25 2日間 9:00～15:00

内容：1日目 展示解説員業務体験（窓口補助及び館内監視）

2日目 学芸員業務体験（整理資料のクリーニング及び軸の扱いブログ更新）

ii) 阿見町立竹来中学校2年生 9名

日時：7/30～8/3 4日間 各日2～3名ずつ 8:30～15:00

内容：午前 展示解説員業務体験（窓口補助及び館内監視）

午後 学芸員業務体験（資料整理及び冊子資料のクリーニング）

iii) 土浦市立都和中学校2年生 2名

日時：10/24 1日間 9:00～15:00

内容：午前 展示解説員業務体験（窓口補助及び館内監視）

午後 学芸員業務体験（資料整理及び冊子資料のクリーニング）

iv) 石岡市立城南中学校2年生 1名

日時：11/15 1日間 9:00～15:00

内容：午前 展示解説員業務体験（館内監視及び団体客への案内配布）

午後 学芸員業務体験（資料整理及び冊子資料のクリーニング）

② 博物館実習 1校1名 7日間

日時：8/7～8/11 8/14～8/15 10：00～16：00

学校名：二松学舎大学

内容：8/7 オリエンテーション／施設見学／業者打ち合わせ立会い
8/8 資料の扱い：昭和初期のはがき、軍隊手帳のクリーニング
8/9 特別展の作り方について説明、資料の扱い：はがきのクリーニング／特攻隊員名簿データ化
8/10 接遇研修／展示解説員業務説明／イベント準備補助
8/11 イベント担当／展示解説見学
8/14 IPMについて説明、資料の扱い：劣化したわら半紙綴りのクリーニング
8/15 窓口業務

(8) その他イベント

① 「ナイトミュージアム！」

日時：11/30（金）17：30～19：00

場所：予科練平和記念館内（20世紀ホールを除く）

内容：閉館後、照明を落とした館内を、学芸員のナビゲートのもとペンライト一つで探検するツアー。小学生から若い世代を対象とし、通常は

見ることのできない夜の記念館を体験していただくことで、記念館への興味を喚起することを目的とする。また、昼の展示解説とは違った解説（予科練生たちの夜の過ごし方、夜に書かれた手紙の紹介など）を行い、すでに展示をご覧になったことがある方にも楽しんでいただける企画。

定員：各回25名 合計50名 事前申し込み制 申し込み数75名で定員を超えたため抽選

参加者数：52名

情報誌掲載：12/15 常陽リビング



② 冬の星空ファンタジー☆in 予科練平和記念館

日時：2/16（土）17：30～20：30

場所：予科練平和記念館敷地内

内容：町商工観光課、観光協会とタイアップして行う、予科練平和記念館のイメージアップと周知、集客を目標としたイベント。



【館内イベント】

①「冬の星空天文学」場所：ラウンジ 事前予約制 1回30分間の4クール

ラウンジの壁面を利用して、プロジェクターで映像を投影しながら星空の解説をする。

協力：つくば星の会

②「夜の博物館でクイズラリー」場所：館内（20世紀ホールを除く）

簡単なクイズに答えながら夜の館内を探検する自由参加型のイベント。レーザー光線、ミラー

ボールにより展示室2箇所はこの日限りの演出を施す。参加者には「予科練の街クッキー」を1人1個プレゼント。

【館外イベント】

- ③「天体観測ショー」 場所：公園側広場 事前予約制 1回30分間の4クール
つくば星の会の指導を受けながら、天体望遠鏡で星や月を眺める。協力：つくば星の会
- ④キャンドルイルミネーション 場所：館裏手の広場及び館周辺の遊歩道
約1,000個のキャンドルによるイルミネーション。
協力：MIT0100万人のキャンドルナイトプロジェクトチーム（みと青年会）
- ⑤ホットスूपブース 場所：館前広場
あみ観光協会員飲食店による飲食物のブース
来場者数：400名 クイズラリー参加者：139名 新聞掲載：3/1読売

(9) 映像記録保存事業

予科練出身者、関係者から当時の話を伺い、映像に記録保存。また、これまでに撮影した映像を自由に視聴してもらうため編集する。

◇池田龍雄氏（甲飛13期・鹿児島空）東京都練馬区在住。

2011年11月にも予科練平和記念館で講演をお願いした池田龍雄氏は佐賀県伊万里のご出身。伊万里商業から甲飛13期生として鹿児島海軍航空隊に昭和18年10月に入隊し、戦闘機パイロットとして訓練を受けた。最後は赤とんぼによる特攻隊員として霞ヶ浦海軍航空隊で訓練され終戦をお迎えになるなど、茨城または阿見との関わりもお持ちである。戦後、佐賀師範学校に入学されたが、終戦時には下士官であり特攻隊員でもあった経歴のために学校追放となり、結局「理不尽な上からの命令で生きなくてもすむ世界」を目指し画家の道に進まれた。岡本太郎など、各芸術分野の第一人者と交わりながら現代美術における確固たる地位を築いてこられた。軍国教育に自然に馴染んだ時代性から、予科練時代、その後の終戦までの軍隊経験、終戦後の人生について今年の講演会で聞けなかったことをお聞きすることが出来た。

◇大東秀夫氏（乙飛24期・三重空）茨城県笠間市在住。

2012年8月に予科練平和記念館に来館され資料のご寄贈を受けたが、その時「伏龍」の特攻隊員であったことを知り、今回お話しを伺うことにした。神奈川県横浜市のご出身。川崎工業機械科から昭和18年12月に乙飛24期生として三重海軍航空隊に入隊される。入隊年月日は大東氏の記憶違いではなく正しいようであり、この点からも終戦が近くなった頃の予科練期別について問題点を提起していただいている（→著作物の記述違いについて）。土浦海軍航空隊に入隊したかったとのことだが、予科練に入ることを熱望し、予科練に入隊できた喜びをそのままに三重で訓練に励んだとのこと。震洋のための塹壕設置に三重県賢島で従事した後、伏龍特攻隊員に選抜され横須賀久里浜海軍水雷学校で訓練を受けられた。伏龍に関する情報が少ない中、訓練の様子などたいへん貴重なお話しを伺うことができたと思う。戦後は大家族を養うために男手1人の中奮闘される傍ら、苦学して建築士等の資格を取得され、以後「よみうりカントリー倶楽部」を皮切りに、ゴルフ倶楽部の開設事業に携わってこられたとのこと。

4. 資料収集・調査研究事業

現在登録資料数 12,728点 平成25年3月までの受入登録数：241点

今年度の主な収集資料：航法要具、倉町秋次教官から予科練生に宛てた手紙、元土浦海軍航空隊看護婦の写真、寄せ書きの日の丸、陸軍兵のはがきなど



5. 広報事業

(1) 関係団体等の訪問

現在周辺市町村の小中学校、宿泊施設、高齢者施設等を訪問。

(2) 広報あみ

毎月1ページに掲載：イベントのお知らせや事業実績等

(3) マスコミ・広報誌への情報提供

記者クラブ、常陽リビング、情報誌、テレビ、ラジオへの情報提供及び出演等

(4) 観覧料の割引提携（各種カード等の提示により、割引を実施）

町イベント、町内飲食店マップなど

(5) ホームページの館長日記、ブログ等による情報発信

・イベントのお知らせ、報告、周辺情報などを不定期に更新します。

・館長日記、ブログ、新着情報

(6) 旅行代理店契約

新たに団体客の集客の見込める旅行代理店との契約を検討します。

(7) その他

・道路案内 あみアウトレットからの誘導看板の設置

・特別展等案内 前面道路に向けて案内板を設置（横4m×縦1m）、企画展毎に張り替えを4回実施

・町内イベントでのパネル展示



6. 予科練平和記念館歴史調査委員の活動について

4名の調査委員により、予科練および海軍航空隊に関する調査研究を実施。

(1) 活動日数 週1回開催

(2) 教育普及事業 講演会の実施、来館者への展示案内、出張講演

(3) 調査研究内容

(4) 調査研究

・防空戦闘に関する調査、土空空襲被害調査

・関東空域防空戦闘調査（継続調査）

・阿見町における兵役

・93式中間練習機の翼（は）布（ふ）塗料

・土空予科練の「震洋」特攻隊

・海軍気象学校



※ これらの調査研究成果は、25年度に『(仮称) 土浦海軍航空隊物語』として発刊予定

7. その他の事業

- (1) 平成 24 年度地域づくり総務大臣表彰受賞
阿見町「予科練平和記念館」団体表彰受賞
表彰式 2月9日(土)水戸プラザホテル
- (2) 年報の発行
- (3) イベントスケジュールの発行
(前期 1～9月 後期 10～3月 自館印刷)
- (4) 記念入場者レセプション(15万人)
15万人 (7/1:開館から712日目)
- (5) 姉妹都市スーペリア市のボン記念ミュージアムで
予科練を紹介するパネル展示
- (6) 新規資料展示
(土浦海軍航空隊正門門標 第三兵舎標札)
- (7) NHK 番組「ファミリーヒストリー」
高橋克典(俳優)編
「ファミリーヒストリー」
新浪剛史(ローソン社長)編
への情報調査、資料提供
- (8) 大学生卒業論文調査協力
(国学院大学、北海道大学、筑波大学、茨城大学、東京大学)
- (9) 水戸市平和記念館「び～すプロジェクト」の「土門拳のまなざし」
展に当館所蔵土門拳写真41点を出品。企画展「伝えておきたい戦争
体験～わたしの八月十五日展～」に土門拳写真2点のデータ提供
- (10) NHK 水戸放送局ほかテレビ局、雑誌社等に資料提供
- (11) 図書『あなたの知らない茨城県の歴史』(山本博文監修 洋泉社 2012.11) 調査協力、資料提供
- (12) 子ども用書き込み式ガイドブック製作
- (13) 読売新聞 戦時体験者特集話者紹介(3月末から連載)





塩月 昭義 氏

宮崎県出身 元甲飛 13 期生 (奈良空)

元回天搭乗員 光基地 (山口県) →大神基地 (大分県)

【 回 天 】

大東亜戦争の開戦劈頭、真珠湾とマレー沖における日本の海軍航空隊の活躍は世界を震撼させた。日本人の多くは海軍航空隊でこの戦争に勝てると思った。

ところがアメリカ海軍は半年後には主力艦の対空砲火を数倍に強化して、日本雷撃機の最低空・最低速での接近中にその大半を撃墜するようになったため日本の海軍航空隊による魚雷攻撃はわずか半年で通用しなくなった。

消耗を重ねる長期戦は総合的に劣る側が不利なのは自明の理である。開戦半年後にミッドウェーで敗れ、続く半年のラバウルを基地とするニューギニアやガダルカナルの航空戦においてミッドウェーの何倍もの搭乗員や飛行機を失う戦いを目の当たりにした海軍将兵の多くは開戦一年後には飛行機ではアメリカに勝てないことを確信するようになった。

勝てない戦いを目撃した若い士官達の中から起死回生の戦術として提案されたのが日本海軍の虎の子の酸素魚雷と潜水艦を活用しようという人間魚雷“回天”(注)であった。

(注) 航続距離を増すため酸素魚雷の酸素ボンベと燃料を2組装備し、特眼鏡という小型潜望鏡や操縦装置をつけた直径1メートル、全長14.75メートル、最大速力30ノットの一人乗り大威力魚雷。10ノットで約80キロメートルの航続距離を有し、大型潜水艦のデッキに最大6基搭載され潜水艦長の指示により自力で発進し敵艦船を襲撃した。主力艦船を失った海軍は回天の生産に全力を上げ、終戦までの約一年間に400基以上を生産し80基が潜水艦で出撃し、さらに約80基が日向灘沿岸と土佐湾沿岸および八丈島のトンネルの中に配置され、米軍上陸部隊の来襲に備えていた。私もその中の一人であった。

味方の損害を最小にし相手への打撃を最大にするのが戦術の要諦であるならば後に特攻と呼ばれるようになったこの攻撃法は一見粗暴に見えるが戦術としてはこれに優るものはない。ただこれには自分の生命を捧げることをいとわない志願者があることが条件である。総合的な国力の差を人間の生命で補おうという戦略で、生還の可能性のない兵器や作戦を採用しないという伝統を捨て切れなかった軍令部も昭和19年6月のマリアナ沖海戦に敗れて連合艦隊の主力を失った後に残された戦局挽回の方策はこれしかなく遂に承認された。

長年にわたる猛訓練を積んだ優秀な飛行機搭乗員の活躍により大勝した真珠湾やマレー沖の戦闘でも、撃沈した敵主力艦一隻あたりの搭乗員の喪失は相手側に対空砲火しかなかったにもかかわらず十名を越

えていた。それに対し回天では基礎訓練を除けば2ヶ月足らずの実技訓練で出撃可能で、命中すれば頭部に装着した1トン半の新型高性能爆薬で大型戦艦でも一人で確実に撃沈することができた。魚雷や特攻機と異なり一度襲撃に失敗しても洋上ならば燃料の続く限り何回でもやり直しができたため、250キロ爆弾しか積めず防御放火にも弱い特攻機に代わる最後の切札として一部の海軍首脳の期待を集めていた。

二度の世界大戦を通じて通商破壊戦の花形であった潜水艦はその隠密性が唯一の防衛手段で、魚雷攻撃の前に敵の駆逐艦に発見されると耐圧の限界まで潜って執拗な爆雷攻撃をかわしきらない限り、破損沈没するか満身創痍で浮上して最後の砲戦を挑むかしかなく、多くの潜水艦が餌食にされた。それに対し回天を搭載した潜水艦ではそれで頭上の天敵を文字通り粉砕することができたため回天の出現以来、洋上における遭遇戦では敵の爆雷攻撃が及び腰になったことを歴戦の潜水艦長は実感したという。回天は潜水艦にとって将に鬼に金棒で搭載魚雷と合わせれば攻撃力は倍加された。

このように回天は性能上も人命経済上も要員養成上も極めて優れたその当時の日本の究極兵器で、間に合わせの兵器とはいえ国家存亡の危機に自らの生命を捧げようとする若者にとってまさに理想の棺桶であった。惜しむらくはその出現が遅すぎ“回天を既墜に返す”ための時間がなかったことである。

終戦直後、マニラに飛んだ日本の軍使に、マッカーサー司令部のサザーランド参謀長が真っ先に尋ねたことは回天を搭載した潜水艦が太平洋上に何隻残っているかということであったという。4月7日の戦艦大和の沈没以来、洋上で戦う日本の艦艇はそれしかなかったからである。約10隻（実際は8隻）との返事に“それは大変だ。一刻も早く戦闘行為を停止するよう嚴重な指令を出してもらわねば”と身を震わしたといわれる。第七艦隊司令官オーデンドルフ中将は“もし戦争がさらに続いていたならばこのものすごい兵器は重大な結果をもたらしていたであろう”と回顧録で述べている。広島と長崎向けの原爆をテニアン島に届けた後の重巡インディアナポリスを撃沈したのは、魚雷で十分と判断したイ58潜水艦の橋本艦長の発射した6本のうちの3本であったが、緊急信号も発しないで沈没した状況からみて回天に違いないとアメリカ海軍は思っていたようである。

「人間魚雷の具申」

黒木博司という機関学校卒の海軍大尉は飛行機による攻撃が犠牲の方が多くて効果が少なくなったのを知ると、この上は一人一艦の体当たりで敵を沈めていく以外に勝つ方法はないとの結論に達し、ガダルカナル敗戦後間もない昭和18年3月、連合艦隊司令官に体当たり兵器の採用を血書嘆願し人間魚雷の計画を要路に次のように説明して廻った。

“このままでは日本は滅亡のほかない。いま何か決定的な手を打たなければ、悔いを千載に残すことになる。われわれはいつでも命を捧げる覚悟はしている。ささやかな命ではあるが捧げて甲斐あるある方法で捧げたい。そのためにはこの兵器を考えざるを得ない。”

その後の長い紆余曲折の中で議論を呼んだ脱出装置をつけるという許可条件の技術的実現が困難を極めたとき黒木大尉たちは“脱出装置は不要である。敵前で脱出を望む搭乗員などいない。正確に敵艦に中ることしか考える者はいない。”とあって反対した。最初の具申から1年半が経過した昭和19年8月

1日、搭乗員から起った脱出装置無用の主張をいれて人間魚雷はようやく兵器として正式に採用され黒木大尉の提案で回天と命名された。この軍令部の1年半の逡巡とその間の潜水艦用法の誤りが日本の敗北を決定的にした。

黒木大尉は試作品による訓練を始めた2日目の19年9月6日に海底突入事故で回天隊最初の殉職者となった。切迫した戦況のもとで設計・製造された回天は試用期間もまったく取れず工場から運ばれてくるのを待ちかねて訓練に使ったため故障も事故も多く、操縦法も手探りから始めるしかなかったため訓練中の犠牲は覚悟の上であった。回天隊の戦死者80名に対して訓練中の殉職者16名という数字がその過酷さを物語っている。

「回天の訓練」

魚雷は発射前に設定された進路と深度にしたがって自動操縦で走る。回天はそれらの値と速度を搭乗員が随時設定し変更することができるが自動操縦であることに変わりはなく自動車や飛行機とちがって初めてでも操縦できる。これが僅か2ヶ月の実技訓練で出撃搭乗員を養成出来る最大の理由であった。ただ水中では盲目航行で、速度と時間の積で走行距離を算出しなければならない。この計算を間違えると潜ったまま島に衝突したりする。

訓練の最初は“隠密潜入露頂法・航法ならびにツリム作成法”といい、海図に記入した航海計画の通りに回天を走らせながら予定地点で露頂（浮上）して特眼鏡で自分の位置を確認し、出来るだけ静かに潜るといえば回天の基本的な操縦術と浮力調整法の訓練で、操縦席の前後に3個ずつ設けられた海水タンクに燃料消費量に応じて均等に注水するのはかなりやっかいな操作であったが、それを怠ると浮力が増して潜りにくくなりスクューの上げる水しぶきでたちまち敵に発見されるし過度に負浮量にすると露頂時の走行が不安定になるので、浮力を僅かに負に維持しておくのは隠密潜入露頂に必須の技術であった。

自動制御というのは常にデジタル制御である。回天の縦舵機は電動ジャイロに連動した取舵と面舵の2値制御で厳密に言うと設定された進路を中心に正弦曲線を描く走行であるが動作そのものは安定している。それに対し横舵機は深度制御と姿勢制御の4値制御となり技術的にははるかに複雑である。そのためか舵が効きすぎて水面に飛び出したり浅い海で海底に衝突したりするイルカ運動を起し易い。設定深度ゼロ（上げ舵一杯）で増速すれば尾部が沈むので水しぶきがほとんどなく潜れ、その後搭乗員が傾斜計と深度計を見ながら深度や速度を調節すればイルカ運動を防げるが慣れないうちは難しい操作である。

そのような基礎的な操縦法の訓練を数回で終わるとあとはもっぱら航行艦襲撃の訓練であった。ところが航行艦襲撃は予想をはるかに超える難しさであった。初めての襲撃訓練のときには襲撃が終わって露頂したとき真後ろにいるはずの目標艦がとんでもない方向のとんでもない遠方にいるのを見てもすぐには自分の失敗と理解できなかつた。ようやく気を取りなおして試みた次の襲撃も同じような失敗に終わった。目標艦の見張り員も“突入地点はわかったがその後どこに行ったか全くわからなかつた”と云う程であった。

潜水艦が航行中の敵の艦船を魚雷攻撃するときの最適位置は目標の進路の斜め前およそ60度、距離1500メートル以内（魚雷が目標の舷側にほぼ直角に中る関係位置）である。潜水艦長は目標を発見すると襲撃の前にまずこの位置を占めようとする。これを占位運動という。水中速力の遅い潜水艦が原則として待ち伏せしかできず丹念にジグザグ運動をする目標への占位運動が極めて困難であるのに比べ、回天では16ノットの戦速で追い討ちも含めてはるかに広い範囲に機敏な占位運動ができる。

襲撃に好適の位置に達すると目標までの距離とその進路および速力を判定し斜進角度表を引いて回天の進路を定め電動縦舵機に指示して全速で突入するわけであるが単眼の特眼鏡で始めて見る敵艦船の進路や速力を判定するにはかなりの熟練を要する。狭くて薄暗い操縦席で短い時間に多くの数表の中から正確な斜進角度を求めるのは易しいことではない。

驚いたことに日本海軍は襲撃訓練用にシミュレータ（机上襲撃演習機）を作っていた。今ならコンピュータで楽にできるであろうが当時は極めて複雑な歯車の組み合わせであった。

私の場合、搭乗訓練をほぼ1日おきに合計21回実施して1ヶ月半で訓練を終えたがその間、海底に衝突したり訓練海面に紛れ込んだ民間の機帆船に衝突したりしながら際どく生き残ることができた。僅かに残っていた現役空母「海鷹」（17,800トン）を卒業訓練の目標艦にしたとき、その大きさに驚いたが同時にこれなら中ると直感した。

特眼鏡で見上げた濃紺の巨大な海鷹の勇姿は今も私のまぶたに焼きついている。制海権も制空権もなくなった南方海域への7回の輸送船団護送作戦に従事し奇跡的に生き残っていた海鷹を目標に中一日おいて2回の襲撃訓練ができたことは望外の喜びであったが残念なことに同艦はその数日後に別府湾口で触雷し別府湾奥の浅瀬に座州したのち、アメリカ艦載機編隊とのロケット弾戦に敗れて豪華客船アルゼンチナ丸以来の短い生涯を終えた。

「護衛空母」

日本海軍は平時に運用される豪華客船を戦時に海軍に徴用することを条件に建造費の半額を負担した。その中で護衛空母に改装されたのは、春日丸—大鷹、八幡丸—雲鷹、新田丸—沖鷹、アルゼンチナ丸—海鷹、（各17,800トン）の4隻である。

「航行艦襲撃と軍令部」

回天は警戒厳重な港湾進入の困難性を予想し洋上における航行艦襲撃を目的として開発されたが軍令部は航行艦襲撃に対する搭乗員の技倆を信用せずあくまで停泊艦襲撃に固執した。ところが護衛空母の対潜哨戒機が活動するようになった20年2月の硫黄島海域や同年4月の沖縄海域においては敵艦船に対して魚雷戦はおろか回天戦の可能な距離まで潜水艦が接近することすら困難になった。泊地や密集する艦船に対する無理な接近により敵の哨戒機や護衛駆逐艦に発見され戦う前に回天もろとも撃沈された潜水艦は回天戦に参加した合計16隻中8隻に達し、戦死した回天搭乗員80名中の35名は潜水艦から発進するいとまもなく親船と運命を共にした。残りの45名の搭乗員も湾口や狭水道の通過中に防潜網に捕捉されたり敵の駆潜艇に攻撃されたりして、大敵を目前にしながら雄図空しく無念の自爆を遂げた例が少なくなかったことがアメリカ海軍の記録でも明らかである。

回天による航行艦襲撃は確かに難しかったが、エンジン停止もスクリューの逆回転も出来ない回天を操って不完全な海図しか頼るものがない状況で始めてしかも特眼鏡で見る湾口や狭水道を防潜網や哨戒艇をかわしながら通過する困難さに比べれば、燃料の続く限り何回でもやり直しができる広い洋上での襲撃の方が搭乗員にとって気分的にはるかに楽であった。しかも陸地を遠くはなれた洋上では電波探知と見張による嚴重な哨戒を怠らなければ潜水艦の方が先に航行中の敵の艦船を発見できることが多かったことを考えると、危険で困難な泊地襲撃よりも洋上襲撃の方が成功の確率ははるかに高かったはずである。

回天の戦果が期待通りに上がらないことと航行艦襲撃に対する回天隊の熱望に応じて軍令部は沖縄戦の最中によりやく洋上における回天の航行艦襲撃を認め、沖縄海域の潜水艦を太平洋に回すことを認めたが、とき既に遅く大型潜水艦も残り少なく我々搭乗員が夢に描いた敵大型艦船との洋上における壮絶な一騎打ちの機会はほとんどなくなっていた。

生き残った我々が声を大にして訴えたいのは、第一線の将兵が厳しく警告したにもかかわらず戦局の逼迫を正しく把握できなかつた軍令部が、資金も時間もなくなった当時の日本において唯一戦局逆転の可能性を秘めた究極兵器回天の採用を一年半も逡巡して時期を失した挙句その用法まで誤り、これで国を救えると信じて勇躍出撃した多くの尽忠至誠の若者をあたら南溟の海に憤死させわが国を破滅に導いた重大な責任である。

マリアナ沖海戦に敗れてサイパン・テニアン両島を占領されたとき、軍首脳も政治家も敗戦を覚悟したという。それから更に無駄な戦いを1年以上も続け犠牲者の8割をその間に発生せしめた当時の日本の戦争指導部の資質とは一体いかなるものであったのか。

【 回 天 の 事 故 と 故 障 】

導入できる新技術をすべて取り入れたとは言え、ほとんど試用期間も取れず操縦法も手探りで始めるしかなかった回天は、乗り物としては極めて不完全で訓練中に故障や事故が頻発した。

「回天の故障」

(冷走)

エンジン起動時に点火せず燃焼ガスも高圧水蒸気も発生しないためにほとんど出力がなく走行不能で訓練は出来なかつた。過度に低速にすると冷走することがあつた。

(気筒爆破)

エンジン起動時に燃焼室に海水の注入ができず燃焼室が溶損する故障。

(出力不足)

魚雷は爆弾や砲弾と同じでただ一回の使用に耐えるだけの強度しかなく通常の内燃機関にあるピストン・リングもないため注意しないと摩耗による出力低下が起きる。

「訓練中の事故」

(イルカ運動による海底突入)

回天の横舵機は深度制御と姿勢制御（走行中に指定された深度をとり出来るだけ水平に近い姿勢を保持するための制御）という2つの機能を全うしなければならないため、潜り始めに尾部が浮いて大きな水しぶきをあげたり浅い深度で高速走行すると水面に飛び出したり潜り過ぎて浅い海では海底に衝突あるいは突入するいわゆるイルカ運動を起しやすい。海底は砂や岩が普通で衝突してもさしたる問題は無いが、河口の先では泥沼になっているところがあり突入するとスクリュウの逆回転機能のない回天は自力では脱出できなかった。

(衝突)

回天には特眼鏡という小型の潜望鏡がついていたがこれは浮上した時の海上観測用で水中ではせいぜい数メートルしか視界が効かずしかも走行中にはかなりの流圧がかかるので必ず特眼鏡は引っ込めて潜ることになっていた。そのため水中では盲目走行で自分の位置を知るには海図上の進路に時間と速度の積で計算した距離を記入して現在位置を知るしかなかった。この計算を間違えると潜ったまま島や陸岸に衝突する危険があった。

また回天では浮上するときに頭上に何があるか知る方法はなく、たまたま浮上したところに船や浮遊物があれば衝突し重大な事故となった。

さらに航行艦襲撃の訓練中に横舵の動作に異常があつて指定した深度より浅いところを走行していて目標艦の艦底に衝突する事故があつた。襲撃は全速で突入するのでこの場合の衝撃は極めて大きく回天の艇体は大きく破損するので搭乗員はすべて死亡した。

「大神基地における事故」

(衝突事故)

航行艦襲撃訓練たけなわのころ久堀隊長が訓練の帰途、見張り船（回天の訓練を見守りかつ訓練海面に民間の船が紛れ込まないように監視する船）に衝突して特眼鏡を壊した。その数日後今度は私が訓練に赴く途中に見張り船の制止も聞かず紛れ込んできた機帆船（焼玉エンジンと帆を併用する民間の小型船）に衝突した。どちらも一歩まちがって回天のどこかに穴が開いて海水が入れば沈没はまぬがれなかった。苦笑いをして上がってくるか別府湾の底で魚の餌になるかの違いはほんの数秒か数十センチの差でしかなかった。

このような不可抗力ともいえる事故ばかりでなく故障発生時の搭乗員の応急処置如何により助かるものも助からないことがあるので搭乗員たるものは多数の応急処置のすべてを知悉し事故の状況に応じた最適の処置を選ぶ必要があつた。

2つの事故を見た大神基地隊の司令は我々久堀隊4人に特別休暇を命じた。翌日、弁当や缶詰を詰め込んだ籐製の小さなピクニック籠を下げて、クラブ契約のしてあつた近くの網元さんの家に行き風通しのよい二階の大広間の畳の上に寝そべて古雑誌などを読みながら過ごした一日は文字通り忙中閑の楽しい思い出である。

(海底突入事故)

第一次出撃隊の訓練が終わり、我々が第二次隊員達の訓練の応援に忙しかったときに大神基地での最大の事故が発生した。7月25日に私は隊長と一緒に目標艦に乗っていた。午後3時にその日最後の原村隊員の発射が予定されていたが大分手間取っているなど思っていると追躡艇が全速で近づいてきて回天を見失ったという。隊長は“射点沈没（発射地点での海底突入）の算、大なり”と素手で発射指揮所に手旗信号するとすぐ目標艦で発射地点に引き返し、薄暗くなった海面に僅かな気泡を見つけて“ここだ”と指差して錘のついた浮標を入れさせた。

前任隊長が救助作業の指揮者になり、サーチライトをつけて潜水夫を入れ尾翼にワイヤーをかけて引っ張っても、半分以上を泥沼に突っ込んだ回天はびくともしなかった。対岸の大分航空廠から駆けつけてくれた救難艇で引っ張ってもだめであった。

私は作業船に前任隊長と一緒に乗り込んで発射指揮所の司令との連絡信号手を務めた。その当時の夜間の近距離通信はもっぱら懐中電灯の点滅によるモールス通信であった。訓練用の回天には頭部の爆薬室に海水を満たしておき事故で沈没したときに圧搾空気排水して浮上する応急ブロー弁用のコックが操縦席の横にあった。原村も操作してみたが泥沼の圧力で排気弁が開かずあきらめたと後で言っていた。

空襲警報が鳴り潜水夫を引き上げてサーチライトを消し、爆音が遠くなるのをじっと待っている間に前任隊長が“今あいつを死なせると後が大変だなー”とぼつりと言った。それを聞いた私は何とか助けなければと思った。

10時間といわれた酸素欠乏の限界時間が近づいたとき、残された手段は回天にかけたワイヤーを回天と直角の方向に引くことしかなかった。回天が折れれば搭乗員を助けることができないうちも知れないことを覚悟しての決断であった。

ほぼ垂直に飛び上がるようにして浮上した回天が水平に落ち着くのを待ちかねたように飛び乗って金槌でハッチを叩いた前任隊長が中からの確かな応答を聞いて“生きてるぞー”と叫んだとき、まわりに集まっていたすべての作業船の上から一斉に“うおー”という歓声が上がったのを忘れることができない。

栈橋で待っていた軍医長と一緒に担架に付き添って白々と明け始めた坂道を医務室に急ぐ途中で“本日の総員起しを07:00とする（徹夜した作業員にしばらくの睡眠時間を与える）”という隊内放送を聞いた原村が“おれのためにみんなにえらい迷惑をかけたなー”というのを聞いたとき、軍医長の心配していたガスによる神経障害はないかと安心した。

回天には事故で長時間閉じ込められたときのために通称“提灯”という炭酸ガスを吸収して酸素を放出する化学装置と長時間の事故のための応急糧食が用意されていた。提灯を開いたのは当然としても、応急糧食まで開けて全部平らげたという原村の研究会での報告にはみんなあきれた。司令以下2千人に及ぶ基地の全員が如何にして助け出そうかと苦慮しているときに当人は平然と非常食料を平らげているとはあきれた神経である。潜水夫の靴音やワイヤーの音が聞こえていたので助かると信じていたという。

応急糧食の中身は言わなかったが素晴らしくうまかったそうである。

(漏水事故)

回天の整備作業が終わると仕上げとして漏水がないか確認するために必ず“水漬け”という試験が実施された。魚雷調整場の横にある細長いプールのような水溜で水漏れを検査するのである。

私は非常に稀な漏水事故を経験した。回天にはキングストーン弁（海水タンクに海水を注入するための弁）が操縦席の下にあった。その軸からなぜか漏水したのである。

キングストーン弁を閉じておけば回天全体の浮力に変化はないが潜るときに前部に流れる海水のためにダウンがかかり、なかなか戻らない。どうしてもだめなら応急ブローを使うことにして傾斜計を見ながら潜航したが深度50メートルぐらいでやっと上昇を始めた。別府湾は深かったが瀬戸内海の基地の訓練海面は浅くこのような試みは無理であったろう。

【 大 神 回 天 隊 】

昭和19年の11月になると大型潜水艦の甲板上に回天を4基ないし6基積んだ特別攻撃隊が山口県の大津島基地から出撃するようになった。翌年の春には近くの光基地からも出撃が始まり、基礎訓練を受けながらそのたびに見送りに出る我々にもひしひしと戦局の逼迫が伝わってきた。栈橋に並んで見送る我々に笑みをうかべて応える出撃隊員もいた。

基礎訓練がようやく終わったころ、急に第4番目の訓練基地要員として同僚約240人とともに別府湾北岸の大神（おおが）基地に行くことになり4月初めに巨大な戦艦が光基地のはるか沖を西進（今思えば戦艦大和の沖縄出撃）するのを見た数日後に大神に着いた。

着いてみると大神基地にはバラック兵舎が数棟建っているだけであった。われわれは翌日から早速建設工事の応援にとりかかった。近くの川に砂利とりにトラックで往復したり、飛行機の格納庫のような回天の整備場の屋根ふきに上がったりした。整備場のわきには巨大なコンプレッサーで空気を圧縮・液化して酸素を分離抽出する酸素工場や、回天に装備されるきわめてデリケートなジャイロコンパス付の自動操縦装置（電動縦舵機）のための専用調整室などが続々と完成し、回天を整備場から湾内に上げ下ろしするトロッコのレールも敷かれて5月末には回天の試験発射ができるまでになった。これだけの工事をわずか2月足らずの突貫工事で完成させ二千名に及ぶ要員による終夜の魚雷整備体制を整えたこと自体、当時の海軍の回天によせる期待がいかに大きかったかを物語る証左に他ならない。

今にして思えばこの2ヶ月の訓練開始の遅れが結果的に私をあの戦争に生き残らせることになったといえる。人の運命などは何が幸せになるかわからないものである。

待ちかねたように6月からは日本海軍独特の月月火水木金金という休日なしの猛訓練が始まった。私の初搭乗は6月1日でそれから1ヵ月半の間にほぼ1日おきに21回搭乗して訓練を終えた。

発射訓練のあった日は毎晩司令以下の兵科士官と下士官搭乗員が全員夕食後の士官室に集まり当日の訓練に関する研究会が開かれた。初めの頃は回天の基礎的な操縦法や、事故や故障の発生した時の応急

処置の適否などが主な議題であったが、襲撃訓練が始まってからは搭乗員がその日の実際の襲撃状況を射法効果図として図上に表し、目標艦の側から見た結果と照合して斜進角度決定の緒元すなわち目標艦の進路・速力および襲撃距離という3つの数値の測定技術の向上法や占位運動の適否が論議された。

魚雷は砲弾や爆弾と同様にただ1回の使用に耐えるように設計された兵器で回天の訓練に使用された魚雷ももちろんそうであった。そのため訓練の終わるたびにエンジン部分を分解掃除して磨耗した部品を取り替える必要があり整備員の苦労は並大抵ではなかった。それでも整備が間に合わなくて訓練に支障を来たしたことは一度もなかった。

度重なる空襲で主要な工場の生産力が低下するなかで回天の生産はかなり順調であった。それに対して回天を搭載する大型潜水艦は数少なくなっていたため、陸上の拠点から回天の持つ速くて長い足を活かして敵の機動部隊や本土上陸部隊を邀撃することが回天の主な任務となり、私たち8人は豊後水道の入り口にあたる麦が浦という愛媛県の小さな漁村の近くで待機することになった。

8月3日の夕刻に待ちに待った輸送艦が到着すると大神基地は戦場のような騒ぎになり、完璧に整備され頭部に爆薬を装着して特眼鏡に注連縄を巻いた出撃回天8基を輸送艦に搭載する作業が整備員総出で深夜過ぎまで続けられた。出撃搭乗員8名は揃って士官浴室で沐浴し第3種軍装に着かえて夕食を済まし出撃祭典を待った。

出撃祭典は深夜0時に基地本館内に祭られていた回天神社の前で始められ、神戸の湊川神社から贈られた七生報国の鉢巻を締めてもらって別れの杯をくみかわし、栈橋に並ぶ夜目にも白い非理法権天（注）や南無八幡大菩薩の幟の下でみんなに挨拶して輸送艦に乗り移ったときには午前2時をまわっていた。輸送艦はすぐに出航した。（注 非理法権天：非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は権力に勝たず、権力は天命に勝たずという楠木正成の幟に記された文字。人事はつまるところ天命のままに動くという意。ヒリホウケンテンと読む。）

艦内で一休みして甲板に出てみるとすでに夜が明けており、佐賀ノ関の精錬所の高い煙突が右手に見えた。これからカンカン照りの豊後水道を横断しなければならないのであるが、そのころは既にアメリカの艦載機は我が物顔に本土上空を飛び回っており、潜水艦は瀬戸内海にまで入り込んでいると言われていて彼らのいずれにも発見されることなくかつ触雷することもなく対岸に到着できる確率はきわめて小さかった。むろん護衛艦などあろうはずもなく輸送艦自身の対空装備といえば前甲板に口径12.7センチの高角砲が1門と両舷に25ミリ機銃が2丁ずつ計4丁あるだけであり、海鷹のようにロケット弾を装備した艦載機の編隊に発見されればひとたまりもないことは明らかであった。

大神基地の建設工事のころ、数人で近くの川で砂利取りをしている最中に空襲警報が鳴り、人っ子一人見えなくなったところで北九州爆撃の定期便になっていたB29の編隊を見上げていたところ、対岸の家並みの瓦屋根にカンカンカンと音がしてアレッと思うまもなく目の前の水面にシュッシュュッシュュと一列に水しぶきが上がった。それを見てハッと気がついて飛び退いたそのあとにチッチッチッと火花が飛んで砂利が跳ねた。

状況からみて我々を狙った機銃掃射であることは明らかであり、味方戦闘機の上昇限度を越える高空から地上に静止している人物が見分けられることに驚くと同時に、射撃の正確さに舌を巻いた。快晴の海を航行中の輸送艦ならばその積荷まではっきり見えるはずで、B 2 9 の編隊に発見されて一斉に銃撃されれば何が起こるか分からなかった。

信じられないほどの幸運に恵まれて目的地の麦が浦に着いたのは午前 1 1 時半であった。直ちに地元漁船まで総動員して揚陸作業がはじめられ 2 時間たらずで 8 基の回天は海に面した 5 本の岩のトンネル内に引き込まれた。

8 月 1 2 日の昼近く、本部より 1 2 時間待機が発令され、すべての仕度をしてトンネルにこもり次の指令を待ったが遂に次の発令はなく翌朝待機命令が解除された。回天で文字どおり“回天の偉業”が成就されると信じていた隊員にとって 8 月 1 5 日の敗戦の報はショックであったがアメリカの報復をおそれた日本海軍は早々に我々を除隊復員させた。

「搭乗員の心理」

短い海軍生活で、もっとも印象に残っているのは勿論大神の回天隊である。初搭乗の時の記憶はいまだに私の脳裏に残っている。夕食後の士官室の黒板に翌日の搭乗割を記入する前任将校の手元を見ていて自分の名前を確認した私は搭乗する回天の番号と発射時刻をメモして直ちに宿舎に帰り、前から用意しておいた自分の第 1 回目の訓練計画を注意深く再検討して寝ずに待っていた指導官に見てもらい細かな修正を繰り返して最終的に OK をもらった時には日付が変わっていた。

それから私は薄暗い常夜灯の点った大浴場に行き、ぬるい風呂に入って下着を着替え、脱いだ下着を洗濯して星明かりで干し場に干した。もしも事故で死んだ場合、汚い下着を着ていたり遺品の中に汚れた下着があったりしては恥ずかしいからである。

睡眠不足で訓練に臨むと勘も判断力も鈍り、訓練効果が上がらないだけでなく事故や故障が起きた時の応急措置を誤る危険も増すから搭乗前夜には十分に睡眠をとっておくようにと先輩に言われていたので、さあ寝ようと思って床についたものの初搭乗の興奮や事故の心配などでとても眠れたものではなく遂に一睡もできないまま“総員起し”を迎えた。いつものとおり朝礼や体操を済ませて皆と一緒に食卓にいたが、今夜ここに座って夕食がとれるだろうかと思うと食事はのどを通らなかった。

徹夜作業を経験された方はおわかりと思うが、翌朝のあのなんとなく体が浮いたようなそして頭の中に霞がかかったような気分で命がけの訓練に出かけるわけで、自分の手に負えないような故障や事故に出会わないようにと回天神社に深々と頭を下げ特別のご加護をお願いしたうえで発射指揮所に向かったものである。神頼みという言葉は無責任の代名詞のように使われるが、人間は自分の能力の限界を超える困難に直面すると準備を尽くした後は神に祈るしかない。大学入試の合格祈願とは次元の異なる祈りである。

今思えば一睡もできないまま訓練に赴いた最初の二、三回の搭乗が最も危険であった。少し慣れて前

の晩に十分眠れるようになると訓練もだんだん充実してきて技量も上がってくる。それでも21回の搭乗訓練中に生きて帰れたのは僥倖としか言いようがないような不測の大事故に遭遇した。同僚や他の基地の例から考えても訓練中に1回ないし2回の死の危険をすり抜けた搭乗員だけが出撃できたのである。

出撃搭乗員に選ばれることは回天隊員として最高の名誉でありそのために日夜研鑽を積むわけであるが一旦選ばれば死は目前に迫っており、覚悟して志願した身ではあってもなんとなく重苦しい気分になってくるのは避けられない。出撃待機中のある日、窓の外を眺めながら郷里の景色や台所に立っている母のうしろ姿などをなんとなく思い出していると軒端でチュンチュン鳴いている雀が目にとまった。無心に戯れている雀を眺めながら、彼らは天から与えられた寿命を自然のままに全うすることができて幸せだなと一瞬うらやましく思った。隊員の作詞した軍歌で“弱冠二十歳の若桜・・・”と歌っていた私はそのとき満18歳と6ヶ月で、“はたち”という歳には届くことのないあこがれがあった。

人間はいかに使命感に燃えようとも自分の命を犠牲にすることに全く頓着しなくなることはありえない。特にものを考える余裕ができたときに深刻である。しかしながら、出撃祭典で七生報国の鉢巻を締めもらったときには全身に電撃が走り、一瞬にして自分自身が神になったと感じると同時に使命を全うしようという意欲が湧然と盛り上がって来た。その後の長い人生においてもこのときに勝る感動を味わったことはない。

多くの特別攻撃隊員が尊い命を自ら進んで国家に捧げた。どの隊員も多数の志願者の中から選ばれた心身ともに健全な若者であったが、人間である以上、出撃前に多少の迷いはあったかも知れない。しかしながら最後は使命感に燃えて気力充実した状態で突入したに違いないと私は自分の経験から思う。そうでなくては突入ができるはずがない。

特に回天では突入するとすぐ衝撃信管の安全装置を解除し電気信管用の電池を接続する冷静な操作と、目標に命中するまで何回でも再突入する強靱な精神力が要求されていた。

特別攻撃隊員に限らず、人のために命を捧げることは人間の死に方としてこれ以上崇高なものはないと今でも私は信じている。

「回天神社と高校生」

平成14年4月、別府湾北岸の大神にあった旧海軍の人間魚雷回天の訓練基地跡に当時の隊員約70名が集まり、回天神社と呼んでいた隊内神社を戦後ずっと預かってもらった近くの住吉神社において元隊員その他の寄金により再建された回天神社の改築記念遷宮祭と犠牲者の合祀を地元の方のご協力を得て盛大に執り行った。

その夜の懇親会が始まる直前、地元の高校生男女数人が引率の先生と共に会場を訪れ、“終戦直前に別府湾で米艦載機に襲われ擱座した‘海鷹’という航空母艦のことをクラブ活動で調べているうちに、昭和20年7月に人間魚雷回天の訓練の目標艦になったという記録を発見しましたがその時のことをご存

知ありませんか”と玄関近くにいた私の友人に聞いたという。友人が“勿論知っています。その時海鷹の下を回天で実際にくぐった4人のうちの2人も来ています。”と答えたところ“是非お目にかかってお話を伺いたい”ということになり、私ともう一人の隊員が会ってわずかな時間であったが話をした。

回天神社という小さな祠があることは知っていてもその由来を知らず、まして自分達と同じ年ごろの若者が国家に命を捧げるための訓練をしていたという事など思いもよらなかった高校生達は、その後地元の老人たちに聞いたり残された資料を調べたりして目の前の海であった事を記録に残そうとした。高校生たちの作った記録の中で彼（女）達は最初に“国を守るとはどういうことか”という政治の根源的な問題を問いかけている。

このような若い人達が現在の日本にいること自体が私にとっては信じられないほど嬉しいことであった。また半世紀以上も昔のわずか数ヶ月の付き合いを忘れず、回天神社改築の企画当初から全面的に協力して下さった地元の皆さんや、新社殿を総ヒノキ作りで釘一本使わずに精魂込めて組み上げて下さった棟梁の心情に心から感謝している。

“日本という国は侵略戦争を起し大勢の若者を戦場に送り特攻攻撃を命じて多数の戦死者を出し、残虐行為で世界中に多大な迷惑をかけた末にその報復で都市のほとんどを焼け野が原にされ多くの国民が塗炭の苦しみを味わった暗い過去をもつ国である、などと教えられた私たちはそれをそのまま生徒に教えてきました。ところが皆さんの話を聞いて以来このような人たちが命を捧げてまで守ろうとした日本という国はそんな悪いばかりの国ではなかったのではないかと気付き、生徒たちと一緒に事実はどうであったのかということの本気で考えるようになりました。”

これは高校生たちとの数年にわたる付き合いのなかで担任の先生があるとき述懐してくれた言葉である。



予科練平和記念館建築概要

1. 建築概要

- ① 名称：阿見町予科練平和記念館
- ② 建築主：阿見町長 川田弘二
- ③ 建築場所：阿見町廻戸 5 - 1 他 42 筆
- ④ 主要用途：資料館
- ⑤ 工事種別：新築
- ⑥ 地域地区：市街化調整区域
- ⑦ 敷地面積：15,583.92 m²
- ⑧ 建ぺい率：60%
- ⑨ 容積率：200%
- ⑩ 建築面積：1,468.04 m²
- ⑪ 延床面積：1,409.08 m²
- ⑫ 高さ：最高点 8.371m , 軒高 7.935m
- ⑬ 構造：鉄骨造平屋建
- ⑭ 開発：都市計画法 29 条の適用除外 都市計画省令 60 条証明申請
- ⑮ 工事費：設計費 53,970 千円（展示基本・実施設計含む）
建築工事費 504,586 千円
外構費 135,450 千円
- ⑯ 設計者：建築設計（株）乃村工藝社（株）吉村靖孝建築設計事務所
展示設計（株）乃村工藝社
- ⑰ 施工者：建築－松浦建設（株） 電気－（株）丸山電気工事
設備－伊奈工業（株） 展示－（株）乃村工藝社



2. 計画概要

(1) 基本方針

- ① 全体配置計画：隣接する公園との連携に配慮し、適切な駐車場配置を行い、歩行者－自動車との動線分離を出来る限り行う。
- ② 災害時の要求性：災害時の一時避難所としての利用も想定する。
- ③ 環境配慮：外光を多く取り入れ、照明のランニングコストを抑える。

(2) 配置計画

隣接する廻戸近隣公園との駐車場を確保するため、国道 125 号線沿いに駐車場を確保し、館をその背後に配置させることにより、歩行者のアプローチを長く確保でき、演出効果を期待させる配置としている。

予科練平和記念館では、予科練や戦史に関する論文・資料研究などの寄稿をお願いしております。詳細は、予科練平和記念館までお問い合わせ下さい。

予科練平和記念館年報 第2号

発行日	平成26年3月
編集・発行	予科練平和記念館 〒300-0302 茨城県稲敷郡阿見町廻戸5-1 tel 029-891-3344 fax 029-888-2470 http://www.town.ami.ibaraki.jp/ yokaren/index.html
印刷	(株)横山印刷